

Newsletter for JADR

I . JADR の果たす役割

JADR 会長 安孫子宜光
(日本大学松戸歯学部生化学教室)

私がIADR, JADR会員にさせて戴いたのは昭和55年と記憶しています。「させて戴いた」という表現は実感で、IADR学会入会の申請には、まずJADRに会員資格の評価を受けなければならない、具体的には業績論文、論文発表が2つ以上あって、できれば国際論文、学会が望ましい、といったような内容だったと記憶しています。また、学内で著明な先生の推薦もお願いする必要があって、それらの書類をそろえて申請書を出した記憶があります。申請当時、前後して、ある臨床系の先生がJADRに入会を申請されて、おそらく業績が足りないということで却下された大変憤慨されていたことを思い出します。

会員になってからは、JADR, IADRの総会、大会に参加し、*J. Dent. Res.*のEditorial Board(1997-2000)でお手伝いさせていただいておりましたが、学会運営の内容には正直いってほとんど無関心でありました。元JADR会長の岡田宏先生からJADR理事会の末席に加えて戴き、第48回の大会を松戸で開催する機会を与えて戴きました。これを機に元IADR会長の作田守先生、元IADR member-at large、幕張IADR総会のLOC委員長の黒田敬之先生、岡田宏先生、前JADR会長の奥田克爾先生、理事会の諸先輩からIADRの実体、IADR DivisionとしてのJADRについて勉強させて戴いてまいりました。今JADR会長の任に就いて何ができるのか小生にとって正直、大きな難問であります。

本学会の特徴は、IADRのLocal DivisionとしてAADRに次ぐ会員数をもつことがあります。また、歯科医学領域の総合学会であります。その実情は国際的視野にみた場合、IADR国際学会の大きな分科会でありながら、JADRとしては多分野の集合学会であるために活発な学会とはいえないのが現状ではないでしょうか。IADR学会員になるための必要条件、あるいはIADR総会への参加に便宜的であるからといった声が聞こえてきます。歴代のJADR会長のお言葉にもあるように、会員一人ひとりが口腔医学研究の推進、生命科学、健康科学に果たす意義を歯科医学研究者共同体として捉え、専門分野を異にするからこそ生まれる発想や意見の交換が期待できるともいえます。したがって、本学会は他の専門分野への積極的な参加ができる学会として位置づけた総合歯科学会として一層、育てていくことが肝要と思います。

一方、あらゆる分野で国際化が叫ばれている時代に国際学会の部会としての機能についても真剣に考えざる時期にきています。そこで改めてIADRの果たすべき役割“IADR Mission”をみてみますと、大きく3つの任務を提唱しています。一つは、ワールド

ワイドでの口腔の健康増進を実現させるための高度な研究と知識の向上、が謳われております。その実践には、世界中の各Division, Sectionを通じてオーラルヘルスの総合的研究を推進するための活動を支援すること、また、研究活動の低開発地域をみつけて特別支援を行うことが重要である、としています。さらに、他の国際的な歯科学会、歯科関連産業界、保健機関あるいは専門教育組織との協力関係を拡大、発展させることも明記されています。二つ目に、IADRは口腔医学研究の共同体を支援するとともに、歯科医学研究の統括代表としての役割を果たすことがあります。具体的には、新会員の拡大、学会活動への参加促進、そして学会の目標達成への戦略計画の実施、についてその実現に向けて学会組織と機能を見直し、改善していく、そして各Division, Section, Groupとその会員との密接なコミュニケーションを図るための中心的機関としてのIADRヘッドクォーターを発展させる。三つ目に、研究成果の情報の伝達と活用を促進すること、があります。すなわち、IADRは口腔医学研究によってもたらされた新知識を啓蒙する目的の達成手段を確実なものにしていかななくてはならない、と記されています。

この“IADR Mission”を改めてみつめると当然ながら、JADRはIADR部会として、これらの任務に対して運命共同体として協力、支援を実行する責務を背負う必要があるといえます。おそらく来たるスウェーデンイェテボリ大会では、かねて懸案のPan Asia-Pacific Federation(PAPF)の設立そして運用の開始が認められるものと思います。今、JADRが口腔医学の発展、健康医学に寄与するためにIADRを通して何を貢献できるのか、そしてIADRから何を学べるのか真剣に考える必要があると思います。最近IADRの部会としてのAADRから学ぶべきものとして、“IADR Mission”を具現化する戦略から、AADRは、National Affairs Committeeを構築してAADR“Cohorts”と称して歯科医学研究の身体健康維持に対する重要性について、草の根運動を展開し、米国議会からももっとも影響力のある学術組織として称賛されています。中心的役割を果たしているDr. Robert Gencoは、昨年11月に、NIH組織下のInstitute of Medicine(IOC)委員会にて、National Institute of Dental and Craniofacial Research(NICDR)における研究の重要性とその意義について、とくに口腔と全身疾患との関係、口腔癌、粘膜免疫ワクチン、ゲノム科学、などについての研究成果、現況、将来について雄弁に証言して歯科医学界の活動として大きな評価を受けています。日本という土壌で歯科医学界が国の中枢に対してこのような姿勢をもって積極的に活動することは、常々必要であると叫ばれているものの実現が難しいと感じています。JADRが国際学会の一構成メンバーであることを再認識して、健康科学に貢献できるよう国際協力での特徴を活かす糸口をIADR/JADR会員として共に考えていく必要があると存じます。

II . JADR 会長を終えて

JADR 前会長 奥田 克爾

(東京歯科大学微生物学講座)

まず、2001年2002年の2年にわたり JADR 会長を無事に務めることができ、会員ならびに理事などの役員の先生方に変な感謝しております。

会長をおえて、JADR が推薦してきた東京医科歯科大学名誉教授の黒田敬之先生が、JADR Vice president に当選されたニュースが入り、大変喜んでいました。2001年は、79回 IADR 幕張大会に向けて、JADR が10年以上にわたり準備を続けてきた開催年でした。事務局長の時に Local organizing committee (LOC) が組織され、元 JADR 会長で IADR の member-at-large でもある黒田先生を委員長としてプログラムから寄付金集め、さらに種々のイベント企画という莫大な量の仕事を緻密にこなされたお陰をもって、IADR 幕張大会は大成功で、host 国を努めることができました。歴代の JADR 会長ならびに役員の先生および黒田先生をはじめとした LOC の方々にお礼を申し上げます。そして、また何よりも JADR 全ての会員が本大会にご支援いただいたこと、大勢の参加に心から感謝しております。今回の IADR Vice president の選挙は、黒田先生のいままでの JADR、IADR へのひとかたならぬご尽力の結果であると確信しています。Vice president、President-elect、President、Immediate-past president として今後ご活躍戴くこととなりますが、JADR も黒田先生への支援が必要かと思っています。

さて、私が JADR 会長時には、様々なことが議論され、IADR との連携の中でも、改善されたことがあったと思っています。JADR 会費の IADR への直接振り込み、入会金の廃止、学生会員を 10\$ にするなどさせてもらいました。また会則につきましても、事務局長を廃止し次期会長に事務局長ならびに副会長の仕事を担当してもらうことになりました。JADR の年度会費は、50\$ になりました。現在の為替レートでは値上げということになりました。その値上げ分を会員の方にどのように還元するか、次期理事会などでも検討することになっています。また、JADR は未だかってないプール金がありました。トップレベルの研究支援や若い研究者の輩出に活用することを継続して検討することになりました。

Newsletter に Pan European Federation (PEF) の設立されたこと、および Pan Asia Pacific Federation (PAPF) の設立準備中であることを書いてきました。幕張大会期間中も IADR council meeting では、PAPF 設立に関する討議が行われました。2002年 IADR San Diego 大会で、我が国、Korea、China、South Asia、Australia / New Zealand の各 Division は、2003年の IADR スウェーデン、Göteborg 大会で PAPF が設立されることに同意しました。JADR だけでなく全ての Division / Section と IADR の連携を密にして 21 世紀の歯学研究の促進、口腔保健の向上に貢献するとい

う趣旨です。また、PAPF では 3 年に一回ずつのミーティングももたれることになります。

JADR 会長就任時、古賀敏比古教授の急逝に接し、大変なショックを受けて我を失ってしまいました。2002年の JADR 大会長をお願いしていた矢先でもありました。この際も、渡辺誠教授に救っていただきました。本 Newsletter に盛りだくさんの記録、報告がありますように、渡辺先生が学部長としてご多忙であり、準備期間の短かったなかで、大学あげてのご協力で素晴らしい第 50 回 JADR 大会を大成功で終えることができました。古賀先生のメモリアルシンポジウムは、トップレベルの内容でした。また、公開シンポジウムも大変な盛り上がりでした。更に、50 回記念式典ならびに記念講演についても、大浦副会長兼企画委員長の緻密な計画のもとで行うことができました。感謝でいっぱいです。

2003年と2004年は、安孫子宜光会長のもと、前会長としてさらなる IADR、PAPF との連携を保ち、JADR の会員のいままでのご支援に感謝しながら、更に尽力したいと思っています。



III . JADR 第 50 回大会記念式典祝辞 Message from IADR President to the members of the JADR

John Clarkson (President of IADR)

On behalf of the IADR Board of Directors and the members of IADR I wish to extend my congratulations to the Japanese Association for Dental Research (JADR) on the occasion of the 50th Anniversary meeting. Fifty years is a long time and shows a strong commitment by JADR to dental research in your country.

The JADR is the second largest Division of IADR with over 1800 members. Indeed the number of members in your Division has been very consistent for many years. This membership of JADR is extremely important to IADR and we thank all of your members for their continued support.

In the scientific field your members have contributed in a major way to the advancement of dental research and with it the oral health of the community. The breath of research from your members in all of the branches of dental research over the years has been really impressive. In addition your collaboration with scientists in other parts of the world has resulted in strong partnerships with individual investigators , with universities and with industry.

Since your foundation the JADR has hosted the IADR General Session on two occasions , in 1980 in Osaka and most recently in Chiba in 2001. This latter meeting was a major success scientifically, financially and socially. The IADR members who visited Japan were very impressed by the professional organisation of the Congress and also the wonderful hospitality extended to them. Many thanks to all involved in planning that meeting.

Attendance by JADR members at the IADR Sessions throughout the world has been impressive and the ability of your scientists to present and communicate their research findings has been much admired. Many of your young researchers have also been very active in competing for the various IADR awards and this bodes well for the future of research in your country.

The governance and management of IADR through its Council , Board and Officers is vital to its survival. The JADR is represented on the IADR Council by three members and their contribution to the activities of Council is appreciated. Over the past 50 years JADR members have served at the highest offices of IADR, as President , Officers and Board members. These reflect very well on JADR and on the high regard IADR members have for your Division. In addition many JADR members serve on IADR Committees and are active in IADR Groups. I thank all of those involved in these activities for their service and commitment.

The IADR is strong scientifically , financially and structurally. We are continually updating our strategic plan and direction in order to ensure the Association is well placed to serve its members. Part of this exercise has resulted in the formation of federation of Divisions in Europe and now in the Asian/Pacific region. The IADR appreciates the support JADR has given to the proposal to have a Pan-Asian Pacific Federation and we look forward to its development.

I also want to take this opportunity to express my thanks to the dental industry in Japan for all their support of IADR over many years. As you know there are a number of International IADR Awards and Fellowships sponsored by companies in Japan , such as the GC , the J. Morita and the Lion Corporations. These Awards / Fellowships help stimulate research and encourage our young investigators.

I want to thank Professor Okuda , President of JADR , for the invitation to attend your meeting. Unfortunately I could not attend due to commitments as Dean of my School in Trinity College and in addition my wife recently had surgery. I am really sorry I could not attend and meet with you.

During my time as Executive Director of IADR and now as President I have had occasion to visit your country a number of times. The welcome and hospitality I have always received has been wonderful. I have made many friends in JADR and they have been very supportive of me during my term of office. I send all of the members of JADR my good wishes on this special occasion and wish you a very successful 50th Anniversary Meeting.

IV . JADR 第 50 回大会記念式典講演 JADR に期待するもの

作田 守
(IADR 元会長 , JADR 名誉会員 , 大阪大学名誉教授)

JADRが、歯科医学および関連分野の研究に重要な役割を果たす学会として、さらに、口腔保健の向上を目指して社会の公益に寄与する学会として、今年で50年を迎えましたこと、誠に喜ばしく、その中の一員ですが、心よりお祝いを申し上げます。今日の記念式典で講演をさせていただきますことは、大変光栄でして、奥田克爾JADR会長、大浦清企画委員会委員長、渡辺誠大会長はじめ、関係者各位に、厚く御礼申し上げます。

JADRの会員が2000名を超える学会に成長しましたことは、歴代会長、役員・理事をはじめ会員各位のご尽力によるものであり、感謝しております。

今回は特に、河村洋二郎先生、三浦不二夫先生から、50回記念に相応しい、本学会に対するご貢献の数々をご披露いただき、本学会の貴重な歩みをお示し頂きました。

私も本学会の会長として1993年、1994年と務めさせて頂きましたが、1996年1月には、はからずもIADRの副会長に選出さ

れました。そのときに頂いた、ときのJADR会長山田正先生をはじめ、JADR会員のご支援に感謝申し上げます。その後2000年のWashington, D.C.での学会で直前会長の任務を終えるまで、役員としての責務を果たすという経験を得ましたので、本学会の母体であるIADRの体制や運営方法などについて、述べさせて頂きたいと思います。国状の違いにより、それらを直ちにJADRに持ち込むことは不可能かとも思いますが、本学会はIADRの部会ですので、JADRの発展に参考にさせていただくことがあれば幸いです。

IADRは、世界の歯科医学および関連分野の研究を発展させる上で、flagshipつまり旗艦としての役割を果たすという認識を強く自覚しております。すなわち、最先端の研究を発表するに相応しい場を、時代の進歩に対応した手法で研究者に提供し、会員にとって魅力ある学会にするための牽引役としての努力が常に払われておりますので、その様々な内容のいくつかについてご紹介したいと思います。

まず、体制から述べさせていただきます。

役員は会長、次期会長、副会長、直前会長、財務担当理事、事務局長、編集委員長の7名ですが、会長、次期会長、副会長、直前会長の4つのpositionの任期は1年で、副会長が正会員による直接選挙で選出されます。現在、今年の副会長選挙の最終局面を迎えておりますが、日本からは黒田敬之教授がその候補者になっておられることは皆さんご承知のことと思います。副会長が選挙によって選出された後は、自動的に次期会長、会長、直前会長と1年の任期で移行していきます。

財務担当理事は任期3年、事務局長は5年、編集委員長も5年で任期は異なりますが、この3つのpositionは理事会の議を経て評議会で指名されることになっています。

これらの役員に任期3年の無任所の理事3名が加わって理事会を構成しますが、それぞれのpositionについて任期中に果たさなければならないduties and responsibilitiesが決められており、それにそって責任を果たすわけです。会長、次期会長、副会長、直前会長の1年の任期は短いと思われるかも知れませんが、副会長が会長になることが決まっているわけですから、副会長、次期会長の期間は、将来会長としてリーダーシップを担うに必要な学会の流れを汲み取る上で重要な期間だと私は認識し、この体制は合理的だと思いました。つまり、学会の運営について、ある程度の連続性が保たれるわけです。JADRにおいても、従来よりはこれに近い形で、会則が見直されているのではないのでしょうか。

私の場合、途上国の若手研究者を育成し、歯科医学研究を発展させ、これを定着させることに努力しました。これは、現会長のJohn ClarksonがExecutive Directorのときに草案し、1996年のSan Franciscoでの評議会で認められた、IADRのstrategic plan、つまり学会発展のための戦略計画に沿ったものです。私がTask Force on Developing Regionsという特別委員会の委員長を会長の期間務め、議長を務めた1999年のVancouverでの評議会でRegional Development Program Committeeを常置委員会として9名

の委員で発足させました。世界のdeveloping regionsからrequest for proposalとして提出された案と予算要求に対して、委員会での審査を経て理事会で実施案を決め、評議会で適切な予算をつけるというものです。予算は、学会開催時の余剰金の10%に加えて、取り敢えず向こう3年間は年間4万ドルの予算枠を設けました。その後、世界の各地でこの予算は有効に活かされていると思います。

役員それぞれの責務、Officers' Duties and Responsibilitiesについては、2000年8月に発行されたJADRのnewsletterで述べさせて頂きましたので、ご覧ください。

学会の開催方法に関してですが、学会のプログラム編成には、21ある研究グループの協力が必要で、JADRの会員の中にも、演題の採否の判定を依頼された会員がおられると思います。学会開催地に対しては、Local Organizing Committeeとしての役割をお願いしております。幕張でのIADRの学会開催時には、黒田敬之教授を委員長とするLOCのメンバーの諸先生方には大変お世話になりました。しかし、事務的な部分は、教授あるいは学会長クラスの経験を持つExecutive DirectorやDeputy Executive Directorをはじめ、学会担当の事務局員が学会の開催を取り仕切ります。日本の国内学会のように、学会開催地の担当大学または教室がその世話を全面的に負担しなければならないということはありません。すなわち、会長先生の教室員が学会開催の雑用を担うのではなく、教室員は本来の仕事である教育・研究また臨床の手を緩めないで学会の開催を迎えることができるわけです。私が、日本にいながら、カナダのVancouverの学会で会長を務められたのは、このような学会としての開催方法によるものです。このような学会の開催方法は、JADRの将来のあり方としてどのように受け止められるでしょうか？

話が少し金銭に関わりますので、日本では学会ともあろうものが、と思われるかもしれませんが、本学会の活動を左右する資金は重要です。IADRはa non-profit corporation、非営利団体、ですが、本部では財務に関することは最重要課題です。つまり、学会を経営感覚で運営しないと、リーダーシップが発揮できる状況を維持できないからです。日本の学会のように、学会が終わって収支がゼロでしたという報告は、不成功の学会と評価されます。つまり、将来の学会運営に支障をきたさないように、黒字を残す必要があるからです。財務担当理事の任期は3年です。当時の財務担当理事は、North Carolina大学の歯学部長でしたが、財務委員会の下部委員会として、投資委員会を作り、投資の専門家を委員に入れました。私が役員をしていたときは、学会の黒字を累積した財源の約75%を株式に投資し、20%位を債券に、あと5%位を現金で保有しており、当時は年間20%以上の資産の増加が報告されておりました。これらの投資から得られる配当や利金を、IADRの運営、運営というより経営といった方が適切かもしれませんが、必要経費に使用しますので、会員にとって魅力ある学会にするため、学会として努力を払うことができるわけです。会員サービスにぜひ必要なものとして、念願のCentral Office、学会事務局、を1996年1月に米国ヴァージニア

州の Alexandria に購入し open しました。購入費の約 130 万ドルのうち 75 万ドルは IADR の reserved fund, 留め置き基金, から支出されました。そのときに, JADR 会員各位にもご寄付をお願いし, 当時は円高でしたので, 1万4千ドルを超える金額になり, これを寄付しました。この場を借りてご協力に対し厚く御礼申し上げます。その Central Office には Executive Director 以下 15 名位の職員がおり, その給料も支払わなければなりません。先ほど述べました developing regions に対する補助金もこれから出されていますし, JADR の会員の学会参加登録費や年会費が他の国際学会と比べて廉価に抑えられているのも, こういった裏付けがあるからです。JADR でも, その活性化にぜひ必要な資産形成について, 国内の法的規制を検討した上で, どのように取り組むことができるかを考える必要があるのではないのでしょうか。

私が会長のときに最も当惑しましたのは, Executive Director の昇給をどのように決定するかでした。米国の大学では, 研究室の Chairman はもちろん, 学部長クラスの人はその下で働く人の給料を査定する経験を持っているようです。日本の大学での勤務評定とは質の異なるもので, 私にはその経験がありませんでした。そこで, 会議に出席した IADR の次期会長, AADR の会長や財務担当理事にその判断をお願いするしかありませんでした。これからの日本の大学も, 設置形態の変更と共に, 大学の教員にも経営的感覚が要求される時代が来るのではないかと推察いたします。

昨年 JADR は幕張で IADR の学会開催を担当しましたが, 学会の開催を担当した Division に対して, 学会開催の余剰金の 20% が贈呈されることになっておりますし, また, 今年の San Diego の学会からは, 参加者が属する Division に対し, 登録費の 10% を参加者数に比例して返戻するというようになりました。各 Division や Section から IADR への参加者が多ければそれだけ多くの返戻金により, 各 Division や Section が予算的に潤うわけで, これらの財源を, 各 Division において研究者の育成はもとより, 学会の活性化に役立てるようにとの意向です。多くの Divisions では, この制度に慣れているようで, 学会が, 研究者にとってやり甲斐のある環境を可能な限り提供するという意味で, なくてはならない財源のようです。JADR として, この IADR からの返戻金を, どのように有効に使うか, 今後の課題の一つではないのでしょうか?

さて, 次に学会としての研究費獲得活動や, 歯科医学としての研究の方向性について述べたいと思います。現会長の John Clarkson が, 今年の San Diego での IADR 総会の開会式で述べた President-elect address が *J. Dent. Res.* の 2002 年 5 月号に掲載されております。彼が Executive Director のときに作成した strategic plan を基にした “The IADR Missions: Promoting Dental Research” というタイトルでの speech です。その中で, strategic plan の使命を達成するため, 学会が果たすべき役割について「議論されるべき問題点」として, 研究活動の活性化に必要な 2 点を挙げております。一つは, 研究費獲得に関する各国の当局に対する政治的な働きかけであり, もう一つは教育学会など他の歯

科医の団体との連携の重要性を挙げております。

別の資料からの引用ですが, 研究費獲得に対する政治的な働きかけとして, IADR で最も大きなアメリカ部会, AADR では, 当局への予算要求の testimony がなされます。今年は, 4月23日に AADR 会長の Steven Offenbacher が「口は一生の間, 常に感染の危機に直面する体の窓口である」との観点から 2003 年度の予算要求として NIDCR に対し, 総計 4 億 2 千万ドルの配分を要求しております。JADR は AADR に次いで多くの会員を擁する部会ですので, 政治的に強力になるための方策について考えることは極めて重要なことではないのでしょうか。

今年の 9 月 13 日には, アメリカ部会 AADR, アメリカ歯科医師会 ADA, アメリカ歯科医学教育学会 ADEA の代表者が NIH の Director や NIDCR の Director と会い, 社会の公益に寄与する歯科医学研究の重要性を訴えております。この席で, NIH Director の Elias Zerhouni は, 検体として採取しやすい唾液を, 血液のように全身の健康診断に使えるのではないかと, という研究に興味を示し, Director の裁量で配分できる NIH の予算の内から 5 百万ドルを NIDCR に対して配分したことを述べております。日本も決して遅れを取っている訳ではなく, 朝日大学歯学部では, すでに 4 年も前から血液の代わりに唾液を用いてダイオキシンの体内蓄積量を測定する方法を開発してきておりますし, そのほか, 各研究機関でも口腔と全身の健康に関する研究は数多く行われております。NIDCR の唾液が血液に代わる診断材料になるか否かの研究は今年の流れの一つかと思いますが, AADR では歯科医学は医学のなかに埋もれるのではなく, 独立した立場で, 医学研究者からも興味を持たれる方向性を, 辿ろうとしているように思われます。

最後に, JADR の泣きどころでも申しましょか, JADR の学会での発表演題数が, IADR での JADR 会員の発表演題数より常に大幅に少ないという問題があります。これは, 欧米に追いつかないと収まらないという日本人の国民性の表れかもしれませんが, 他の部会ではみられない現象です。他のどの部会でも, 旅費が少なく済む地元での発表数の方が遠隔の地で行われる IADR での発表数より多いのが普通です。IADR のサイドから見ると, 日本からの参加者が多いのは歓迎すべきことですが, JADR のサイドからみた場合, 看過すべき現象ではないように思われます。

JADR での発表内容と同じものは IADR では受理されないわけですから, JADR で発表される研究内容のオリジナリティーは保護されているということです。

話がいささか飛躍するかもしれませんが, この仙台の地で学ばれた, 東北大学出身の田中耕一さんがノーベル化学賞を受賞されました。IADR に属している研究者でいまだ, ノーベル賞を受賞された方はおられないようです。JADR で発表した研究内容が将来, ノーベル賞の受賞対象として選ばれるという夢を, この仙台の地に因んで JADR の今後に託し, 今日の話を終らせて頂きます。ご清聴ありがとうございました。

V . 第 50 回 JADR 総会・学術大会報告

1. 第 50 回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会ならびに第 50 回大会記念式典のご報告

大会長 渡辺 誠
(東北大学大学院歯学研究科加齢歯科学分野)

会員の皆様には益々ご活躍のこととお慶び申し上げます。

2002 年度 (平成 14 年度) の JADR 総会・学術大会は、昨年 11 月 30 日 (土) と 12 月 1 日 (日) の 2 日間にわたり、JR 仙台駅北隣にあります「ネ！ットU 仙台市情報・産業プラザ」において開催させていただきました。今回の大会は、本来、故古賀敏比古・JADR 理事 (九州大学大学院教授) のもとで開催される予定でしたが、古賀先生が 2001 年 10 月に不慮の事故により急逝されたことによりまして、次年度の主管を予定しておりました東北大学大学院歯学研究科の加齢歯科学分野が 1 年早く担当させていただくこととなりました。このため準備期間も十分とはいえ、今大会の開催にあたりましては、私どもの教室に加え口腔診断・放射線学分野ならびに顎口腔機能解析学分野の 2 つの教室にもお手伝いいただき、万全を期すべく準備してまいりました。

今大会では、何よりもまず JADR 活動における在りし日の古賀先生のご功績を讃えるため、古賀先生と親交の深かった先生方によるシンポジウムの開催をプログラムの中心に据えることとし、学会初日に、西原達次先生 (九州歯科大学教授) をモデレーターとして総勢 6 名の先生方による「古賀敏比古先生メモリアルシンポジウム 齶蝕細菌と歯周病細菌についての最近の知見」を開催させていただきました。古賀先生を偲びつつ、齶蝕や歯周病の原因菌に関する免疫学的または遺伝子学的観点からの最新の研究成果が報告されました。

また、山口朗先生 (長崎大学大学院教授) をモデレーターとし、近年急速に発展している学問領域の一つである再生医療をテーマに取り上げたシンポジウム「歯科領域における再生医療の将来 - 生物学的基盤に根ざした再生医療を目指して - 」では、4 名の先生方より基礎医学から歯科臨床までの様々な視点からの興味深い講演をいただきました。最先端技術のトピックスということで、会場は超満員となり通路まで人が溢れ出るほどの盛況ぶりでした。

熱田充先生 (長崎大学大学院教授) をモデレーターとしたシンポジウム「接着材料を用いた修復物と補綴装置の臨床成績」では、最近の歯冠修復治療では欠かすことのできなくなった接着材料にフォーカスを当て 5 名の先生から接着材料を応用した歯冠修復物の臨床成績を詳細に報告していただきました。さら

に今大会では初日の昼休みに高橋信博先生 (東北大学大学院教授) をモデレーターとする「近未来のカロロロジー - 知の再構築と新しい治療・予防法を求めて - 」というタイトルのランチョン・シンポジウムが開催され、最新のエビデンスに基づきカロロロジーを再考する機会をつくっていただきました。

特別講演の招待演者にはアメリカから Edward T. Lally 教授 (Department of Pathology, School of Dental Medicine, University of Pennsylvania) と韓国から Jin Kim 教授 (Department of Oral Pathology, Yonsei University College of Dentistry) をお招きし、Lally 教授からは歯周病細菌の leukotoxin による免疫担当細胞のアポトーシスについて、Kim 教授からは口腔前癌病変の癌化を予測する遺伝子マーカーについて、それぞれ初日と 2 日目にご講演をいただきました。



特別講演



懇親会 (仙台ホテル)

一方、本大会はJADRが1953年に発足してから第50回目という記念すべき大会にあたることから、これまでのJADRの活動に多大な貢献をなされた先生方をお招きし、JADRの歴史を振り返る記念式典を開催することになりました。式典は大浦清副会長の司会により厳かに始められ、まずJADR50周年を祝うJohn Clarkson IADR会長からのメッセージ(録音)が会場内に流れました。続いて歴代のJADR会長としてお招きした河村洋二郎(1973-74年会長)、三浦不二夫(1985-86年会長)、作田守(1993-94年会長)各JADR名誉会員の先生方から、当時のご苦労話やエピソードを交えた記念講演を行っていただきました。その後、奥田克爾会長より学会功労をねぎらうプラークと記念品(デジタルカメラ)が名誉会員に贈呈され、最後に、山田正(1995-96年会長)名誉会員からのウィットに富んだご挨拶でなごやかに式典の幕が閉じられました。式典に欠席されました田熊庄三郎(1979-80年会長)、佐々木哲(1991-92年会長)各名誉会員のお二人には、後日プラークと記念品を大会校から送らせていただきました。

2日目の最終プログラムには、医学領域と歯科補綴学領域の先生を講師に招いて市民フォーラム「歯・口と全身機能」を開催し、歯や口が全身機能に及ぼす影響や普段は気づかない歯と口の役割をわかりやすく一般市民に解説することにいたしました。市民の参加によって会場がほぼ一杯になるほどの反響があり、このような企画が歯科のアイデンティティーをアピールする上できわめて重要であるという印象をもちました。

以上のように本大会は、特別講演2演題、ランチョン・シンポジウムを含めた4つのシンポジウムでの講演19演題、一般発表としては口演発表42演題とポスター発表87演題の合計129演題、さらに50回記念式典と市民フォーラムによって構成された充実した内容となり、参加者数は正会員239名、臨時会員71名、学生・留学生9名、学内スタッフ80名など合計463名という盛況な大会にすることができました。末筆ながら、奥田会長、大浦副会長には大会開催に際しまして大変貴重なご助言ならびにご教示をいただきましたことに心より感謝の意を表し、今後のJADRの益々の発展と会員の皆様のご活躍をお祈りして学会報告とさせていただきます。



市民フォーラム

2. 古賀敏比古先生メモリアルシンポジウム報告

西原 達次
(九州歯科大学口腔微生物学講座)

第50回JADR総会・学術大会のシンポジウムIIで、2001年10月14日に九州の霧島にてお亡くなりになった九州大学教授古賀敏比古先生のメモリアルシンポジウムが開催されました。昨年のちょうど今頃、JADR Presidentの奥田先生から、この企画についての話しを伺い、縁のある研究者でシンポジウムを企画してもらいたいという提案をいただきました。私としては、日本大学衛生学教授の山下先生と相談してモジュールしていくということでお引き受けしました。

さて、古賀先生が臨床・基礎の両面で予防歯科学を牽引してこられたことは、あらためてお話する必要がないと思います。このことは、国内外の歯科研究者が広く認めるところです。古賀先生のこの分野での業績を見れば一目瞭然です。ということもあり、私と山下先生との話し合いは、齶蝕と歯周病研究の基礎的な研究成果を紹介しようということですぐにまとまりました。加えて、講演の先生を決める段階でも、古賀先生の幅広い人間関係に助けをいただき、スムーズに決定いたしました。

当日、山下先生から、古賀先生の足跡を医局でのスナップ写真を交えながら紹介していただき、シンポジウムがスタートしました。次いで、高橋先生(広島大学)から古賀先生との国立予研時代の思い出を話していただき、その後、現在、精力的に進めている粘膜免疫の特徴とその重要性について口演していただきました。2番目の演者として、佐藤先生(東京歯科大学)に、*Streptococcus mutans*のグルカン結合タンパク質Cについて遺伝子レベルで話していただき、sortaseにより細胞壁ペプチドグリカンに共有結合する一群の分子であるということが報告されました。もう1題、*S. mutans*に関連して、山下先生(日本大学)から、古賀先生とともに7年間にわたって進めてきた血清型多糖抗原である細胞壁多糖の合成に関与する*rml*遺伝子、*gluA*遺伝子、*rgp*遺伝子について、最近の知見を交えて話していただきました。

後半は、歯周病に関する研究、なかでも、古賀先生が精力的に取り組んでこられた*A. actinomycetemcomitans*の病原性についての演題が続きました。まず、加藤先生(東京歯科大学)から、この細菌の菌体抽出物中に、抗ヒトIL-10抗体と反応する分子量約65 kDaのタンパクが存在し、これが宿主の応答を攪乱している可能性が報告されました。次に、中野先生(九州大学)から、*A. actinomycetemcomitans*の5種の血清型特異多糖抗原合成に必須な遺伝子群について、興味ある実験結果が報告されました。最後に、私が本菌の毒素に関する分子生物学的研究成果を報告し、6つの演題発表が終了しました。

口演後、フロアーからお二人の先生に追加発言をしていただきました。まず、奥田先生から、古賀先生の齶蝕の予防に関する業績の一つである齶蝕ワクチンについてお話をいただき、在り

し日の古賀先生との思い出話しをしていただきました。次いで、九州大学の中田先生から、古賀先生が大学の運営面でも精力的に活躍されていたことが紹介されました。

このような流れでシンポジウムを進行し、モジュレーターとしての任を果たすことができました。今回のシンポジウムの開催にあたり、渡辺大会長を始めとして、今年度のJADR Organizing Committeeの関係者の方々に変なお世話になりました。最後になりましたが、このことに対し、心からお礼を申し上げます。

3. Mineralized Tissue 分野報告

柴田 俊一

(東京医科歯科大学大学院顎顔面解剖学分野)

初日の口演はA会場で行われたがB会場で再生医学のシンポジウムがあった関係で聴衆が少ない上暖房が入っておらず大変肌寒い状況であった。B会場が狭く聴衆が会場に入りきれない状況であったことを考えると会場の配分をもっと考慮するべきであったと感じられた。演題4題はいずれも形態系のものであった。東北大学からTypeI Collagen から切り出されたC-propeptide が骨芽細胞 象牙芽細胞などの細胞分化やコラーゲン合成に関与しているという内容の発表があった。これは免疫組織化学と、*in situ* hybridization を組み合わせて遺伝子発現、タンパク合成両面からみたもので説得力ある内容であった。東京医科歯科大学からラット骨の生理的遠心移動に付随する酵素組織化学に関する発表があった。骨の形成面にはアルカリフォスファターゼが吸収面には酒石酸抵抗性酸性フォスファターゼ活性があることを未脱灰の凍結切片で観察したものが切片作成の技術に大変感心させられた。次いで広島大学から骨移植に関する演題が2題出された。一題はAledronate に関するものでもう一題はrhBMPを応用した骨移植に伴う骨形成の年齢による違いを検索したものであった。いずれも臨床応用を目的としたものでシンプルな解析方法を用いたものであった。

2日目のポスターでは日本歯科大学新潟歯学部から人の歯の構造と原子組成の違いを民族間で比較したものが提示された。これは同時にPCRでamelogenin 遺伝子との関連も検索しており人の歯を材料としている点が独創的なものであると思われた。広島大学からop/op マウスにM-CSFを投与するrescue 実験に関する演題が出されこの物質の機能に関する考察が行われていた。岡山大学からはCTGFの軟骨における発現を免疫組織化学、*in situ* hybridizationで検索した演題が出されていた。この実験では下顎頭軟骨、大腿骨頭軟骨と成長板軟骨との発現様式の違いによってこの物質が、外力に関するadaptation に関与する可能性を示していた。筆者も下顎頭軟骨に関する研究を行っているが非常に興味深い研究であると感じた。その他、抗てんかん薬の骨量におよぼす影響(東北大学)、歯の漂白とその後戻りに関する実験的研究(奥羽大学)、骨密度測定に関する新しい手法(九州歯科大学)に関する演題が提示された。いずれも臨床と密接に関連したテーマであり本学会ならではのものであると感じられた。



口演発表(A会場)

全体としては基礎、臨床両サイドからの演題がみられ本学会の特色はよく出ていると思われるが、どうしても本家のIADRに比べると数の面でややさびしい感じがしたので、もう少し演題数を増やす努力をしてもよいかと思われた。

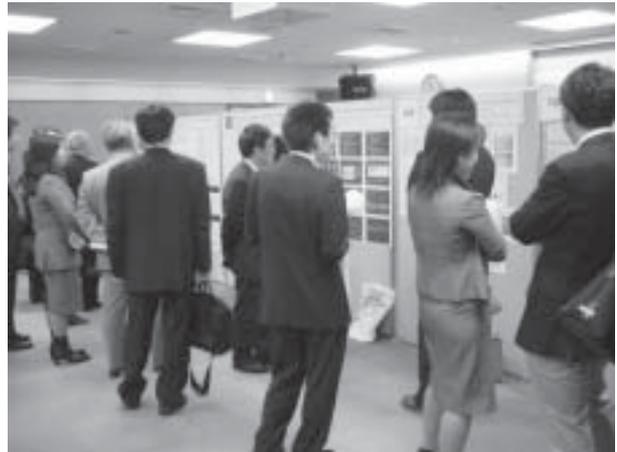
4. Pharmacology 分野報告

坂上 宏

(明海大学歯科薬理学講座)

第50回JADR総会・学術大会における薬理学関係の発表は、ポスター5題及び口頭1題であった。初日では、歯科材料の薬理作用の発表があった。最近、フリーラジカルと細胞障害活性の関係が注目されている。歯科で使用されている2-ethoxybenzoic acid と eugenol との相互作用を細胞障害活性やESR解析で調べた研究、eugenolの2量体が、単量体よりも毒性のない濃度で、NF- κ B活性化の抑制を介して抗炎症活性を発現することを示した研究、及び、歯科臨床で多用されている光重合開始剤カンファキノンの細胞毒性と活性酸素の相関をフローサイトメトリーにより調べ、毒性の低いことを示した研究が興味深かった。また、近年ポリフェノールが注目されつつあるが、糖鎖を含む高分子フェニルプロペノイドポリマーのリグニン、リポ多糖(LPS)と同等に、マクロファージ様細胞を活性化して一酸化窒素(NO)・シトルリン・アスパラギンの産生を促進するが、タンニンやフラボノイドなどの低分子ポリフェノールは、逆にLPSの促進効果を抑制することから、分子の大きさと糖の存在が活性化に必要なことが示唆され、今後の作用メカニズムの解明(結合部位の同定や、シグナル伝達経路)が楽しみであった。2日目の発表では、ヒト歯肉線維芽細胞におけるGタンパク質共役型の7回膜貫通型受容体PAR-1を介したIL-6産生が報告されていたが、シグナル伝達経路の解明、他のサイトカインの産生に対する影響や*in vivo*に及ぼす影響などが興味を持たれた。Valpuroic acid や zonisamido 等の抗てんかん薬の慢性投与が成長期ラット骨密度

を減少させるという発表があったが、最近、イノシトールリン酸の関与が共通の作用メカニズムであるとする報告をふまえ、今後の作用点の解明が大変待たれる。また、招待講演者の Jin Kim は、天然のクロロフィリンが抗発癌活性を示し、日本人が愛用している緑茶主成分のエピガロカテキンガレートとの活性の比較検討が興味を持たれた。また、Dr. E. T. Lally は、*Actinobacillus actinomycetemcomitans* leukotoxin が、ミトコンドリアを介する経路で、細胞内活性酸素の増大、細胞質内カルシウム濃度の上昇、カスパーゼ 2, 8, 9 の活性化により壊死とアポトーシスの両方を誘導することを示して興味深かった。今回、初めて、JADR の学会に参加したが、ポスター会場と口頭発表の会場が近い比較的小じまりとしたスペースで、基礎と臨床の先生方との共同研究をベースにした議論もできて、好印象を受けた。



ポスター発表 (C 会場)

5. Prosthodontics 分野の印象記

丸尾 幸憲

(岡山大学大学院医歯学総合研究科咬合・口腔機能再建学分野)

第 50 回 JADR 総会・学術大会が 11 月 30 日と 12 月 1 日の 2 日間、仙台市 ネ！ット U 仙台市情報・産業プラザにおいて開催された。今回の一般演題数の総数は 129 題であり、このうち歯科補綴学分野に関連する演題数は 26 題であった。そのうち最も多かったものは、材料系に関するものであり 8 題の演題があった。うち材料自体に関するものが 5 題、接着に関するものが 3 題あり、依然として補綴治療における材料あるいは接着に対する依存度は高いものであると思われた。また、金銀パラジウム合金に関する 2 題の発表があり、昨今のパラジウムの急激な価格変動に付随した保険点数の変動を思い起こさせられた。第 106 回日本補綴歯科学会学術大会緊急シンポジウムにおいて行われたように、今後、金銀パラジウム合金に代わる優れた保健適用金属が登場することを期待する。次いで顎口腔機能に関する演題数が 7 題であり、そのうち補綴物と顎口腔機能との関連についての報告が 2 題あり、今後も顎口腔機能に限らず生体に調和した補綴物をいかに作製し、装着するかについての研究が重要であると思われた。また、有床義歯に関する研究については、その材料に関するものが 2 題、維持力に関するものが 2 題、印象に関するものが 2 題の計 6 題の発表があり、インプラントに関する演題数 4 題に比べて多いものであった。接着材料を用いた修復物と補綴装置の臨床成績とのテーマによりシンポジウムⅢが企画され、支台築造、補綴物の接着、接着性レジン、キャストセラミックおよびポーセレンアンレーに関する臨床成績についての報告があった。支台築造を行う場合には、残存歯質の状態が極めて重要であること、接着性プライマーあるいは接着性セメントは有用であること、また補綴治療に着手する際に当該歯牙の状態、残存歯の状態あるいは材料自体の性質などにより合着材を使い分ける必要について示された。いずれにせよ補綴物装着後のみならず、治療前からの口腔内環境の改善が補綴物の予後を決定する重要な因子であると思われた。また、市

民フォーラムでは、「歯・口と全身機能」のテーマのもと、口腔ケアの重要性、歯の保存の重要性あるいは口腔と全身との関連についての講演があり、有床義歯装着者ではカンジダ感染率が高いとのデータを思い起こし、有床義歯のみならず、補綴物装着後の口腔ケアについて今後一層の指導が必要であると痛感した。

6. Dental Material 分野報告

亀山 敦史

(東京歯科大学歯科保存学第三講座)

私は第 46 回 (千葉)、第 47 回 (神戸) に続いて 3 度目の参加であったが、Dental Material 分野に関わる者として最も寂しい思いをした大会であった。というのも、同日にバイオマテリアル学会が開催されていたこともあり、歯科理工学系の先生方にほとんどお会いすることができなかつたためである。通常、IADR や JADR において Dental Material 分野からの発表の割合は非常に多いだけに、よけいに寂しさを感じたのかもしれない。

本大会では「接着材料を用いた修復物と補綴装置の臨床成績」と題するシンポジウムが行われた。補綴分野、保存分野いずれにも関わる内容だけに、両分野から多くの先生方が参加された。「支台築造の経過観察」についてご発表された中村先生 (鶴見大学) からは、同大病院での支台築造の流れとして、レジン系セメントによる合着の割合が増加していることが示されたが、これは従来の支台築造におけるセメント合着が結果的に歯根破折を招いた結果を反映したものと考えられ、歯牙保存を考慮した支台築造に対する対処法について考えさせられた。また、「貴金属用プライマーと接着剤を併用した補綴装置の臨床成績」についてご発表された松村先生 (長崎大学) は、貴金属用プライマー開発の経緯や、臨床での裏話などを興味深くご講演された。

同分野からは口頭 6 題、ポスター 5 題の合計 11 演題の発表が行われたが、なかでも椿本先生 (大阪大学・院) が発表された「セ

ラミックインレーの経時的辺縁劣化量の分析」に関しては、上記のシンポジウムと併せ、多くの先生が興味深く聴かれていたようである。セラミックなどの審美系材料を用いた歯冠補綴・修復は、接着材料の発展なくして行うことのできない手法である。したがって、従来の材料、歯質それぞれへの接着もさることながら、辺縁劣化への対応（接着材料の物性強化、歯質の経時的変化の防止、辺縁部の応力集中への対応など）のさらなる研究の必要性を改めて痛感させられた。

私自身も「加熱象牙質に対する4-META/MMA-TBBレジンへの接着」というタイトルでポスターによる研究発表をさせていただいた。健全歯質に対する各種市販接着材料の接着性能や機械的性質についてはほぼ臨床上問題のないレベルにまで発展・開発がなされているが、実際の臨床では唾液や血液の存在、歯質の変化（齲蝕罹患、根管消毒薬や漂白材料の影響）など、接着性に関わるさまざまな要因を多く含んでいる。「加熱」という要素も、あまり臨床上考えられることではないものの、接着に不利な条件の一つに挙げられるものであり、検討すべき内容ではないかと考え、発表させていただいた。

他の多くの分野では、生体内での現象を追及する内容の発表が多いのに対し、Dental Materialの領域は、実際の臨床を念頭に置きながら、材料や手法の新規開発を主としている場合が多い。また、その評価は長期間の臨床成績に頼らざるを得ない。したがって、より生みの苦しみが多く、それでいて各発表も比較的地味な内容になりやすい。しかし、歯科医療の発展のためには欠かせない分野の一つであるため、今後JADRでの同分野の発展を祈る次第である。



口演発表 (B会場)

7. Craniofacial Biology 分野報告

河田 俊嗣

(広島大学歯学部附属病院口腔育成歯科矯正歯科診療室)

第50回国際歯科研究学会日本部会(JADR)総会・学術大会が、2002年11月30日と12月1日の2日間仙台市で開催された。

本学術大会のシンポジウム1では、歯科医療における再生医療の将来と題して、非常に興味深い内容が4題発表された。特に京都大学の茂野啓示先生のご発表は、人体応用に対し強い力点をおいたご研究であった。これまで不可能であると考えられていた歯の再生が現実なものとなる期待を十分伺わせる内容であり、歯の再生はそう遠くない将来可能となるであろうと感じた。一方、当該分野に関する一般講演は口演が2題とポスターが9題と、決して多いとはいえないが、他の分野と交差している発表も散見されることから、単純にこの分野が活気がないわけではない。

Craniofacial Biology 分野に限ったことではないが、一つの病態あるいは病的な現象について、基礎と臨床講座とが連携して研究する体制が見受けられる。講座の垣根を飛び越えて、臨床で直面する患者の病気を基礎的手法を用いて探求することは、本来あるべき研究姿勢であると私の師であられる多くの先生方と共通した考えのように感じた。すなわち、本JADR総会において、研究のための研究ではなく、本当の意味での研究成果についての発表が多いことに気が付いた。Craniofacial Biology 分野における研究の到達目標は、臨床で直面する問題について、基礎的探求を的確に行い、再度臨床にフィードバックすることである。in vitro で得られた結果のみで完結するのではなく、in vivo で再度確認し、明確な根拠(evidence)を確認を得ていただきますよう工夫されることをお奨めしたい。

最後に、この度のCraniofacial Biology 分野のご発表はすべてにおいて将来性の高い研究内容のように感じた。

8. Microbiology 分野報告

前田 伸子

(鶴見大学口腔細菌学講座)

平成14年11月30日(土)、12月1日(日)の両日に開催された第50回国際歯科研究学会日本部会(JADR)総会・学術大会はJADR第50回の記念式典もあったためか、多くの方々に参加し、非常に華やかな雰囲気にも包まれていた。本大会のMicrobiology分野の学術プログラムにおいて、口演発表5題(22~26)、ポスター発表18題(108~125)の総数23演題の発表が行われた。いずれの口演発表でも活発な質疑応答が行われ、ポスター会場も熱気にあふれ熱心な討議が交わされていたが、今回、とくに印象に残ったいくつかの発表を紹介したい。

口腔常在真菌 *Candida albicans* に対する cationic peptides の抗真菌活性を検討した広島大学の研究は本 peptides が従来使用されてきたアンホテリシンBなどの抗真菌剤に代わりうる可能性

を示唆していた。

また、歯科用ユニットのwater lineに存在するバイオフィルムが院内感染対策における大きな問題になっているが、大阪大学の研究結果はPVDFチューブをwater lineに用いることにより、バイオフィルム形成を抑制できることを明らかにした。

歯周病の病態別の診断や治療法の選択に歯周病原細菌の定量的な分析は必須であると思われる。TaqManプローブを用いたReal Time PCR法による検索がこの目的にきわめて有用であることが大阪大学の研究から示された。

九州歯科大学と日本大学歯学部との共同研究では *Streptococcus mutans* の細胞壁多糖は単なる修飾物ではなく細胞壁に物理的強

度を与える働きがあることを示し、さらに細胞壁多糖は薬剤の感受性にも関係することからラムノース骨格の重要性を指摘していた。

また、口演やポスター以外の学術プログラムで、齲蝕と歯周病の原因細菌あるいは関連細菌を取り上げたランチョン・シンポジウム「近未来のカリオロジー」と古賀敏比古先生メモリアルシンポジウム「齲蝕病原細菌と歯周病細菌についての最近の知見」、ペンシルベニア大学のDr. E. T. Lallyによる特別講演「The cellular microbiology of *Actinobacillus actinomycetemcomitans* leukotoxin」の会場には多くの方々が集まり、本学術大会における Microbiology 分野の研究の重要性を再認識した。

VI . IADR 韓国部会(KDDR) 学術大会報告

大浦 清

(大阪歯科大学薬理学講座)

JADR奥田克爾会長をはじめとするJADR理事会の先生方からのご推薦により昨年12月13日,14日にCollege of Dentistry, Seoul National Universityで開催されたThe 21st Annual Academic Session & The 19th General Meeting of the International Association for Dental Research(KDDR)において特別講演をさせていただく機会をいただきました。

学会前日の12日に関西空港よりソウルに入りましたが、飛行時間は約2時間で、改めて最も日本から近い国であることを実感致しました。気温は大阪よりかなり低く、0 近くで風が吹くとwind chillでより低く体感致しました。夜にはマイナス10 近くになっていたようです。ソウルはおりしも1週間後(12月19日)に大統領選挙を控えており、直接選挙のせいもあり、KDDR 役員の先生方もそれぞれの応援でにぎやかでありました。12日



学会が開催されたソウル大学歯学部病院



開会式後のKDDR 役員の先生方と著者

の夕方は宿泊先の Sofitel Ambassador ホテルの中華料理店でソウル大学歯学部長をはじめ歴代会長、役員の先生方が出席され盛大に歓迎していただきました。半数近くの先生方は英語を話されたり、時々流暢な日本語を話されるので少し戸惑いました。

翌13日は午前8時ごろKDDR会長のJea Seung Ko会長自ら車で迎えに来ていただき、ソウル大学歯学部まで途中の観光案内をしていただきながら、15分間のドライブを楽しませていただきました。9時30分から開会式があり、Ko会長、Ju-Whan Kim初代会長、大韓歯科医学会会長である延世大学Kim教授の挨拶の後、JADRを代表して一言挨拶をといわれ、少し緊張致しましたが、最初と最後は韓国語の簡単な挨拶をいれ(簡単な韓国語会話集を参考にしましたが発音がうまくできなかっただけではありません)、KDDR大会の成功とKDDRの発展、KDDRとJADRがいつまでも相互に親密な交流が続くことを祈念する挨拶を英語でさせていただきました。

学会は1日目がシンポジウム1(Chronic Orofacial Pain & TMD)、特別講演、口演発表が17題、ポスター発表20題、2日目がシンポジウム2(Bone Biology For Implant Treatment)、シンポジウム3(Implant Biomaterials: Past, Present, Future)、シンポジウム4(Clinical Guideline For Implant Treatment)ですべてインプラント関係の内容で10題ありました。その他口演発表が16題、ポスター発表が16題ありました。今年は例年になく、ソウルで数多くの学会が開催されたとのこと、また選挙で参加者が少し少ないとのことでした。また、この日はちょうどソウル大学歯学部の学部長選挙があり、ソウル大学の先生方は入れ替わり立ち代りあわたくしにされておりました。

私の特別講演は1日目の午後4時から5時までpower pointを用いて講演させていただきました。抄録は以下の記載の内容であります。

Condition and prevention of oral biofilm diseases

KIYOSHI OHURA

(Department of Pharmacology, Osaka Dental University, Hirakata, Osaka, Japan)

Dental caries and periodontal diseases, which are two major diseases in the dental field, occur and progress due to intra-oral bacteria. The bacterial mass is called dental plaque, and plaque control to remove plaques has been the preventive and treatment methods of the two diseases.

Recently, dental caries and periodontal disease related to oral biofilm are called oral biofilm disease.

As life-style related diseases, which is a new disease concept with the relationship with eating habits, not only diabetes, obesity, hyperlipidemia, hyperlithuria, cardiovascular disease, and cancer of the large intestine, but also dental caries and periodontal disease are considered, and life-style improvement by dietary instruction has been applied to the prevention and treatment of these life-style related diseases.

Therefore, the current concept is that dental caries and periodontal

disease are life-style related diseases, as well as bacterial infectious diseases.

Causative bacteria of dental caries and those of periodontal disease are present in the form of biofilm.

The causative bacteria of the two diseases adhere to tooth surface, and to the periodontal tissue surface in periodontal pockets, respectively, and make micro-colonies, forming biofilm.

Biofilm has problematic aspects such as strong adhesion of biofilm to tooth surface and the periodontal tissue, increases in drug resistance of biofilm bacteria, and deterioration of infection due to bacteria released from biofilm.

It is considered that the preventive and treatment methods of dental caries and periodontal disease can progress by solving these problems.

約1時間の講演の後、3名の先生方から質問をいただき、有意義な Discussion をさせていただきました。この後、BUM-HO JOUNG SCIENTIST COMPETITION が別室で行なわれておりました。この賞は KDDR の初代会長の Ju-Whan Kim 博士（大韓民国学術院正会員であり、また私も大阪歯科大学の名譽講師でもあります）が基金を寄付され優秀な若手研究者のために毎年表彰をされています。BUM-HO というのは Kim 博士の雅号から取っているとのこと。JADR も若手研究者にとって名譽や励みとなるような独自の奨励賞（Hatton 賞とは別の）も考えていきたいものです。そして若い研究者には大いに世界にはばたいてもらいたいものです。

今後、両国がもっともっと交流を深めて、KDDR では韓国語で発表、JADR では日本語で発表するのではなく、IADR の Division としてはできる限り共通の英語で発表をして（2～3年間に一度は共催するようにして）、IADR を通してアジアにおいては世界の中核となるよう協力し合っていく必要があるのではないのでしょうか。

今回の訪問ではたいへんお世話になりました KDDR の Ko 会長はじめ何度もメールで連絡いただきました KDDR Secretary の Kyungpyo Park 助教授および KDDR の役員の皆様方に感謝申し上げます。また、このようなすばらしい機会を与えていただきました奥田会長をはじめ理事会の先生方にあらためてお礼申し上げます。

Ⅶ．理事会、評議員会および総会報告

JADR 幹事 加藤 哲男

（東京歯科大学微生物学講座）

本年度は、理事会4回（2月18日、5月13日、8月5日、11月29日）、評議員会（11月30日）および総会（12月1日）が1回ずつ、それぞれ開催されました。

1) 2002年度会計決算と2003年度会計予算の承認

2002年度決算は、亀山洋一郎監事並びに黒田敬之監事による監査承認後、2003年度予算とともに第4回理事会を経て、評議員会および総会において承認されました。

新入会員が多かったこと、また IADR 大会の分配金が繰り入れられたことなどで、収入は予算よりも高い執行率となりました。支出は、ほぼ予算通りだったため、次年度への繰越金は、1,000万円以上の増額となる決算となりました。それを受けて、JADR が若い研究者を含め多くの会員にとって魅力ある学会となるように、また若手研究者を奨励していく賞を設けていくなど JADR の将来を見据えて、2003年度予算では「将来事業計画基金」として2,000万円を特別会計に繰り入れました。

2) 2003年度事業計画

以下の2003年度事業計画が提案され承認されました。

総会：第51回 JADR 大会開催時

理事会：4回開催（うち1回は、第51回 JADR 大会開催時）

評議員会：第51回 JADR 大会開催時

学術大会：第51回 JADR 総会・学術大会は、零石聰教授（大阪大学）を大会長として、2003年12月1日～12月2日の会期で千里ライフサイエンスセンタービル（豊中市）において開催される予定です。

Newsletter：2回発行（1月および8月発行予定）

KDDR 学術大会に特別講演者を派遣

2003年度 IADR Council Meeting に4名を派遣

2004年度 Hatton Award 候補者5名を選考

JADR Annual Report を IADR 本部へ報告

3) 次期役員および評議員について

役員選出規定に従い JADR 次期役員（案）が上程され、第4回理事会の議を経て、評議員会で承認されました。また役員選出規定に従い JADR 新評議員の選出が行われ、理事会の議を経て、会長がこれを委嘱しました。

任期は、いずれも2003年1月1日から2004年12月31日までです。

4) 会則改定について

JADR 会費が IADR 本部にドルだてで一括して徴収されるのに伴い、また多くの大学院生などに入会してもらい JADR をより活気あるものとするために、会則の改定が理事会で審議され、変更点について評議員会および総会の議を経て承認されました。

主な変更点は、学部学生あるいは大学院生などを学生会員と

すること、事務局長を廃止しその職務を次期会長(副会長)に担当してもらうこと、正会員および学生会員の会費はIADR事務局に、50 US\$あるいは10 US\$払い込んでもらうことなどです。

5) 終身会員の推挙、承認

会則に従って、以下の先生が終身会員として、理事会より推挙され、評議員会および総会において承認されました。(ABC順、敬称略)

石田 甫 南 直臣 中井宏之

日本歯科大学新潟歯学部歯科保存学教室第二講座 加藤 喜郎
 松本歯科大学口腔細菌学教室 藤村 節夫
 朝日大学歯学部総合歯科学講座保存修復学研究科 山本 宏治
 愛知学院大学歯学部口腔衛生学講座 中垣 晴男
 京都大学大学院医学研究科口腔外科学教室 村上賢一郎
 大阪歯科大学小児歯科学講座 大東 道治
 大阪大学大学院歯学研究科顎顔面矯正学教室 高田 健治
 岡山大学大学院歯学総合研究科口腔保健学分野 渡邊 達夫
 広島大学歯学部第二歯科補綴学教室 濱田 泰三
 徳島大学歯学部歯科矯正学講座 森山 啓司
 九州歯科大学歯科理工学講座 小園 凱夫
 九州大学歯学研究院口腔保健推進学講座口腔感染免疫学分野 花澤 重正
 福岡歯科大学機能生物化学講座 阿部 公生
 長崎大学歯学総合研究科摂食機能回復診断治療学 熱田 充
 鹿児島大学歯学部歯科保存学講座第一 鳥居 光男

VIII. 新役員名簿および新評議員名簿

役員名簿(2003年~2004年) (敬称略)

会 長 安孫子 宜光 日本大学松戸歯学部生化学教室
 副 会 長 大谷 啓一 東京医科歯科大学大学院歯学総合研究科硬組織薬理学分野
 前 会 長 奥田 克爾 東京歯科大学微生物学講座
 会計理事 零石 聡 大阪大学大学院歯学研究科先端口腔疾患予防学分野
 理 事 高野 吉郎 東京医科歯科大学大学院歯学総合研究科硬組織構造生物学分野
 理 事 恵比須繁之 大阪大学大学院歯学研究科口腔分子感染制御学講座
 理 事 山本 照子 岡山大学大学院歯学総合研究科顎顔面口腔矯正学分野
 理 事 小田 豊 東京歯科大学歯科理工学講座
 理 事 根本 君也 日本大学松戸歯学部歯科理工学講座
 理 事 中田 稔 九州大学大学院歯学研究院口腔保健推進学講座小児口腔医学分野
 理 事 高橋 信博 東北大学大学院歯学研究科口腔生物学講座口腔生化学分野
 理 事 今井 奨 国立保健医療科学院口腔保健部口腔保健技術室
 監 事 亀山洋一郎 愛知学院大学歯学部病理学講座
 監 事 大浦 清 大阪歯科大学薬理学講座
 幹 事 柴田 恭子 日本大学松戸歯学部生化学教室

評議員名簿(2003年~2004年) (敬称略)

北海道医療大学歯学部歯科薬理学講座 東城 庸介
 北海道大学大学院歯学研究科口腔健康科学講座 亘理 文夫
 岩手医科大学歯学部歯科薬理学講座 加藤 裕久
 東北大学大学院歯学研究科口腔生物学講座 笹野 泰之
 奥羽大学歯学部口腔生化学講座 堀内 登
 明海大学歯学部口腔診断学講座 藤澤盛一郎
 日本大学松戸歯学部小児歯科学講座 前田 隆秀
 東京医科歯科大学大学院歯学総合研究科う蝕制御学分野 田上 順次
 東京歯科大学臨床検査学研究室 井上 孝
 日本歯科大学歯学部薬理学教室 筒井 健機
 日本大学歯学部衛生学講座 山下 喜久
 昭和大学歯科病院高齢者歯科学教室 佐藤 裕二
 神奈川歯科大学口腔外科学第二講座 久保田英朗
 鶴見大学歯学部歯科生化学教室 深江 允
 新潟大学大学院医学総合研究科摂食環境制御学講座 前田 健康

IX. IADR Vice-presidentの選挙結果報告

- 黒田敬之先生を次期 Vice-president に選出 -

JADR 会長 安孫子宜光

(日本大学松戸歯学部生化学教室)

会員の皆様におかれましてはすでにご存知のとおり、昨年、黒田敬之 JADR 元会長(東京医科歯科大学名誉教授)と他2名により次期のIADR Vice-president選挙が行われました。選挙は、7月に公示され、11月1日で投票が締め切られ、その後の開票作業を経て、本年1月5~8日のIADR Board Meetingで結果が報告されました。結果は、黒田先生が見事当選を果たされ、本 Board Meetingで先生の次期のVice-president就任が承認され、2月1日からは、Vice-president electとなり、Swedenで開かれます第81回IADR総会にて正式に就任の運びとなりますが、会員の皆様にはひとまずご報告申し上げます。今回の結果について、黒田先生には心よりお祝い申し上げますとともに、IADRとJADRのさらなる発展のためにご活躍いただけるものと確信しております。末筆ですが、黒田先生にご投票いただいたJADRの全会員にはこの場を借りて厚くお礼申し上げます。

X . 2003 IADR Hatton Awards Competition 候補者決定

2003 IADR Hatton Awards Competitionには30名の応募があった。JADR から本賞への応募者数は例年通り5名であり、全理事による慎重審査の結果、以下の先生方(敬称略)が候補者に決定した。

加来 真人(広島大) 金子 友厚(医歯大)
西 真寿美(徳島大) 半田 慶介(神歯大)
吉田 明弘(九州大)

3. 「インプラント埋入体表面の修飾」
モデレーター: 宮崎 隆(昭和大学)

公開シンポジウム(予定)

連絡先:

大会長 零石 聡

準備委員長 永田 英樹

大会事務局 大阪大学大学院歯学研究科先端口腔疾患予防学分野内
(〒565-0871 吹田市山田丘1-8)

TEL 06-6879-2922 FAX 06-6879-2925

E-mail: nagatah@dent.osaka-u.ac.jp

XI . 第51回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会のご案内

大会長 零石 聡

(大阪大学大学院歯学研究科先端口腔疾患予防学分野)

会 期: 2003年12月1日(月), 2日(火)

会 場: 千里ライフサイエンスセンター

(〒560-0082 豊中市新千里東町1-4-2)

TEL 06-6873-2010

懇 親 会: 12月1日(月) 千里阪急ホテル

演題申込締切: 8月29日(金)

特別講演:

1. Dr. Richard John Lamont
(Professor, Oral Biology Department University of Florida,
College of Dentistry)
"Pathogenic Strategies of *Porphyromonas gingivalis*"
2. KDDR からの招待者(予定)

シンポジウム:

1. 「歯周病の感染制御をゴールにおいた先端研究と臨床への応用」
モデレーター: 天野敦雄(大阪大学)
 - 1) 高柴正悟(岡山大学)
 - 2) 中山浩次(長崎大学)
 - 3) 天野敦雄(大阪大学)
 - 4) 安孫子宣光(日本大学松戸)
2. 「タバコ研究における口腔科学の役割」
モデレーター: 埴岡 隆(福岡歯科大学)
 - 1) 沼部幸博(日本歯科大学)
 - 2) 千葉逸朗(北海道医療大学)
 - 3) 埴岡 隆(福岡歯科大学)
 - 4) 浜島信之(名古屋大学)
 - 5) 中村正和(大阪府立健康科学センター)

XII . 第81回IADR 総会(Göteborg)の レポーター募集

ご存知のとおり2003年6月25日~28日 Göteborg で第81回 IADR 総会が開催されます。つきましては、JADR 会員の先生方から IADR 総会の様子など8月発行予定の JADR Newsletter 第2号にご紹介いただきたくご案内いたします。総会へ初めて参加される方からでも大歓迎です。レポーターをお引受けいただける先生は7月7日(月)までに事務局(E-mail: o-socie@bcasj.or.jp, Fax: 06-6873-2300)までご報告下さい。多数お待ちしております。

XIII . Hatton Awards 応募候補者 (2004年度 IADR, Honolulu, Hawaii) の募集

2004年度の Hatton Award 応募候補者を募集します。応募締切は6月30日(月)事務局必着です。応募ご希望の方は4月以降に応募用紙一式を事務局までご請求のうえご応募下さい。

本賞は第10代 IADR 会長 Edward Hatton 博士の功績をたたえて設けられた若手研究者を顕彰するための賞です。応募カテゴリーは、Junior 部門, Senior 部門, Post Doctoral 部門です。各 Division から推薦を受けた候補者は第82回 IADR 総会での Hatton Award 本選にて審査を受け、上位2名が順位付けで受賞者に選ばれます。

CONTENTS

I . JADR の果たす役割	1	I . The Role of JADR	1
		Dr. Yoshimitsu Akiko: President of JADR	
II . JADR 会長を終えて	2	II . Experience as President of JADR	2
		Dr. Katsuji Okuda: Past President of JADR	
III . JADR 第 50 回大会記念式典祝辞		III . Message from IADR President to the Members of the JADR	3
Message from IADR President to the Members of the JADR	3	Dr. John Clarkson: President of IADR	
IV . JADR 第 50 回大会記念式典講演		IV . For Further Development of JADR	3
JADR に期待するもの	3	Dr. Mamoru Sakuda: Honorary Member of JADR, A Professor Emeritus of Osaka Univ.	
V . 第 50 回 JADR 総会・学術大会報告	6	V . The 50th JADR Academic Meeting and Annual Business Meeting 6	
1. 第 50 回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・		1. Summary of the 50th Academic Meeting of JADR and the	
学術大会ならびに第 50 回大会記念式典のご報告	6	50th Memorial Ceremony	6
2. 古賀敏比古先生メモリアルシンポジウム報告	7	Dr. Makoto Watanabe: The Chairman of the 50th Academic Meeting of JADR	
3. Mineralized Tissue 分野報告	8	2. Dr. Koga Memorial Symposium	7
4. Pharmacology 分野報告	8	Dr. Tatsuji Nishihara: Kyushu Dental College	
5. Prosthodontics 分野報告	9	3. Mineralized Tissue	8
6. Dental Material 分野報告	9	Dr. Shun-ichi Shibata: Tokyo Medical & Dental Univ.	
7. Craniofacial Biology 分野	10	4. Pharmacology	8
8. Microbiology 分野報告	10	Dr. Hiroshi Sakagami: Meikai Univ.	
VI . IADR 韓国部会 (KDDR) 学術大会報告	12	5. Prosthodontics	9
		Dr. Yukinori Maruo: Okayama Univ.	
VII . 理事会, 評議員会および総会報告	13	6. Dental Material	9
		Dr. Atsushi Kameyama: Tokyo Dental College	
VIII . 新役員名簿および新評議員名簿	14	7. Craniofacial Biology	10
		Dr. Toshitsugu Kawata: Hiroshima Univ.	
IX . IADR Vice-president 選挙結果報告	14	8. Microbiology	10
		Dr. Nobuko Maeda: Tsurumi Univ.	
X . 2003 IADR Hatton Awards Competition 候補者決定	14	VI . A Report of the KDDR General Session	12
		Dr. Kiyoshi Ohura: Osaka Dental College	
XI . 第 51 回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・		VII . Reports of the Board Meeting, the Councilors Meeting	
学術大会のご案内	15	and the Annual Business Meeting	13
		Dr. Tetsuo Kato: Deputy Executive Director	
XII . 第 81 回 IADR 総会 (Göteborg) のレポーター募集	15	VIII . New JADR Officers and Councilors	14
		IX . The Election of the Vice-president of IADR	14
XIII . Hatton Awards 応募候補者		X . 2003 IADR Hatton Awards Candidates from JADR	14
(2004 年度 IADR, Honolulu, Hawaii) の募集	15	XI . Announcement of the 51st Academic Meeting of JADR	15
		Dr. Satoshi Shizukuishi: The Chairman of the 50th Academic Meeting of JADR	
		XII . Call for Reports of the 81st IADR General Session in Göteborg	15
		XIII . Call for the Hatton Awards Competitors of the 82nd IADR	
		General Session in Honolulu (2004) from JADR	15

編集後記

JADR ニュースレター 2003 年 1 号をお届けします。13 ページにありますように 1 月から JADR 新執行部が立ち上がりしました。大谷が本号よりニュースレターの編集を担当させていただきます。よろしく願います。さて今回のニュースレターは JADR 新旧会長の挨拶に続いて、昨年 11 月～12 月にかけて仙台にて東北大学・渡辺誠会長の主管により行われました第 50 回 JADR 学術大会の報告を特集しました。さらに古賀敏比古先生メモリアルシンポジウムをはじめとする学術大会のレポートを掲載することができました。レポートを執筆いただいた先生方にお礼申し上げます。また JADR 50 周年記念式典の様子と、その際に披露された John Clarkson IADR 会長の祝辞、1998～99 年に IADR 会長を務められた作田守先生の御講演内容を載せましたのでご覧ください。さて記事にありますように、黒田敬之先生が IADR Vice-president に選出されました。作田先生に続いて IADR 執行部に JADR 会員が選出されたことは大変喜ばしいことです。黒田先生のこれからの活躍を期待したいと思います。本年の IADR 総会はスウェーデン、イエテボリで 6 月に開催されます。14 ページにありますようにレポーターを募集しております。学会へ参加される方は奮って応募ください。会員の方々にはニュースレターへのご意見、ご要望等がありましたら、遠慮なくお知らせくださるようお願いいたします。

発行 国際歯科研究学会日本部会 (JADR)

連絡先: 〒560-0082 豊中市新千里東町 1-4-2 千里 LC ビル 14 階 学会センター 関西内 FAX 06-6873-2300 担当: 木村雄一郎
JADR 副会長 大谷 啓一 (東京医科歯科大学大学院歯学総合研究科硬組織薬理学分野)

連絡先: 〒113-8549 文京区湯島 1-5-45 FAX 03-5803-0190 E-mail kohya.hpha@tmd.ac.jp

2003 年 2 月 20 日 発行